

2024年度  
入学試験問題  
(B日程)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんに書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお【場面1】は宝田ほのかの視点で、【場面2】は【場面1】の後半が武市陽太の視点で書かれています。

【場面1】  
いつの間にか、隣に武市がいた。

「これ」  
武市は、挨拶もなく、まるく膨らんだ手提げ袋から、いきなり手品のようカラフルなボールを取り出した。

①「うっそー！」  
それを見た瞬間、ほのかは叫んだ。すごいものだということ、分かったからだ。

それは、紙だけでできていた。驚くほど複雑に、精巧に、幾枚もの紙を合わせて作り上げた、壊れやすく可愛らしいボールだった。

「すごいじゃん！ 武市が作ったの？」  
ほのかは、武市の顔を見て、それから自然と指を見た。少し小さく短く、短い爪。この指が、紙を丁寧に折り合わせていき、こんなに綺麗なボール玉を作ったのか。

武市は、ほのかに褒められても表情を変えず、（X）つまらなそうな口ぶりで、  
「これ、自由工作に、出そうかな……」

と言った。  
ほのかは、武市が絵や工作がとて上手なことを思い出した。毎年、武市の作品が選ばれて、職員玄関の前の展示の棚に飾られていることを。

「ゼッタイ出すべき！」

心から言った。

②「超上手だし、こんな誰も作れないもん」

③「明るい声で言いながら、うらはらに、ほのかは自分の気持ちに沈んでゆくを感じた。」

武市は、こうやって物を作るのが得意なんだなと思った。物を作ることに、夢中になるんだなとも思った。自分にはそんなふうで得意なものも、夢中になれるものも、なにもない。

ほのかは、このあいだの委員決め、学級会を思い出した。

④「教壇に立ったとたんに、足が竦んだこと。ひと言も発せなかったこと。」

ずっと考えないようにしていたのに、なぜか今になって思い出した。

「宝田さんも、作れる」

⑤「まるでほのかを慰めるように、武市は言った。」

⑥「少しぼんやりしていたほのかは、」

「え？ ほんと？ じゃあ作りたい」

と、わざと明るく言った。

「作れる」

武市はもう一度言った。

「どうやって作ればいいの。教えて」

「これ、三十四枚、折り紙を使う」

「……たくさん持って来たよ」

⑦「ほのかは家にあつた折り紙を見せた。」

⑧「それを見た武市は、今日いちぼんの顔をした。目を輝かして、折り紙を見つめた。」

「それだけあれば、作れる。けど、部品を糸で、糸でつなぐところが、少し難しい。そこだけ。針が紙を破くから、そこは、気をつけたら」

⑨「普段おとなしい武市が、懸命に説明をしてくれたのは嬉しかった。だけでもほのかは、武市の説明を聞いていたうちに、やっぱりそんなに難しいものを自分には到底作れないと思った。」

「……うちにできるかな。武市みたいに、上手じゃないし」

「宝田さんなら、なんでもできる」

「ええー、そんなことないよ。うち、バカだし」

ほのかは笑った。

武市は笑わなかった。

⑩「宝田さんは、なんでもできる」  
ほのかに言い聞かせるように、彼はゆっくりと繰り返した。

それを言われた時、なぜだかほのかは、泣きたくなかった。

⑪「どうして泣きたくなるのか分からなくて混乱した。」

⑫「本日は、自分でできることなど、何も無いような気がしていた。周りの人たちからもそう思われていることを、彼女は知っていた。そしてそのことを、心のどこかで受け入れてきた。」

⑬「代表委員にリッコウホした時も、皆に笑われているのを知っていた。前田さんは、ほのかが代表委員になることを「やだ」と言った。それを聞いて笑った人たちも、みんな「やだ」と思っていたのかもしれない。」

⑭「ただどほのかは、ずっと、なりたかったのだ。なりたかった。なりたかった。六年生の最後の委員決めだった。最後まで手を挙げ続けた。」

⑮「それなのに、いざ代表委員になって、教壇に立つたら、足が竦んだ。」

何か喋ってしまったら、その言葉はほとんど落ちて、教室の真ん中で、皆に踏みつけにされると思った。そうなるのはいつものこと  
で、これまではそんなことはちつとも怖くなかったのに、代表委員になってしまったから、怖くなったのだ。クラスの代表である自分  
が、そんな恥ずかしいことはできないと思ったから。うまくやろうと思ったとたん、ほのかのシタはこわばった。代表委員として初め  
てメバエたプライドが、かえって心をチヂコマラせた。あの時の自分は、みつともなかった。  
だけど、  
——宝田さんは、なんでもできる。

武市は言ってくれた。

こみ上げてきた涙を目の奥に押しこむように、ほのかは細かくまばたきをする。言われたばかりの言葉を、心の奥で反芻する。こん  
なに信じてもらえたこと、自分をまるごと認めてもらえたこと。目の前の少年のまなざしは澄んでいる。彼の言葉に嘘はない。それが  
分かるから、ほのかは泣きたくなるのだ。

### 【場面2】

「ありがとう。でも、うちにできるかな。武市みたいに、上手じゃないし」

歩きながらほのかの声のトーンを落とした。

陽太は、ほのかが自信のなさそうなことに戸惑った。

ほのかはクラスの誰よりも頭が良く、授業で誰よりもたくさん発言するし、自分の意見をいつでもしっかり言葉にできるのだ。それ  
は陽太にとって、眩しくキョラカナ姿だった。

「宝田さんなら、なんでもできる」

「ええー、そんなことないよ。うち、バカだし」

「宝田さんは、なんでもできる」

心をこめて言うと、目の前にいる少女の瞳の奥に何かがあった。うずまきのように素早い、かすかな光だった。奇跡のような、尊い  
ものを見た気がして、陽太は一瞬、息をのむ。それは、彼女の瞬きの中に溶けてゆく。

「じゃあ、やってみる」

光を得たような、少し濡れた目をしてほのかは言った。

「武市、ありがとう」

その言葉を聞いて、陽太は、今日はどうしてもいい日だと思った。

（朝比奈あすか『君たちは今が世界』）

\*反芻…くり返し思い、考えること。

問一 —— 線部1〜5のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、必要な場合はひらがなで送りがなも書きなさい。

問二 —— 線部①「それを見た瞬間、ほのかは叫んだ」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で  
答えなさい。

ア まるで手品師のように袋からカラフルなボールを取り出したので、心から驚いてしまったから。

イ 紙を幾枚も使ったこのように複雑なボールを作れるはずがないと、高をくくっていたから。

ウ どうしたら紙だけでこのように精巧なボールを作れるのか見当もつかず、ひどく感心したから。

エ 紙だけで作ったとは思えない繊細で可愛らしいボールが、どうしても欲しくなってしまったから。

問三 (X)に入ることをばとして最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ もし ウ 決して エ たぶん オ きつと

問四 —— 線部②「うらはらに」とありますが、ここで使われている意味として最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えな  
さい。

ア 同時に イ 反対に ウ 徐々に エ 無理に

問五 —— 線部③「ほのかは自分の気持ち沈んでゆくを感じた」とありますが、どうして「気持ちが沈んで」しまったのですか。

解答らんこに合うように、本文のことばを使って三十五字以内で説明しなさい。(、。」「は字数に数えます。)

問六 —— 線部④「少しぼんやりしていた」とありますが、ほのか「ぼんやりしていた」理由として最も適当なものを次のア〜エか  
ら選び、記号で答えなさい。

ア ながさめの言葉をかけられたので、心が見すかされていと思うたから。

イ 器用に工作ができる武市のことばがうらやましくて、悔しくなったから。

ウ 思い出したくないつらい記憶がよみがえり、それに気をとられていたから。

エ 嫌だった学級会のことを思い出したので、心を落ち着かせたかったから。

問七 —— 線部⑤「それを見た武市は、今日いちばんの顔をした」とありますが、この場面から読み取れる武市の様子として最も適当  
なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア ほのかがわざわざ折り紙を持ってきてくれたので、さりげない気配りに驚いた。

イ ほのかが折り紙にとっても興味を示したので、どんな折り方を教えればいいか悩んだ。

ウ ほのかが折り紙をたくさん持っていたので、一緒に作品を作れると思いき喜んだ。

エ ほのかの様々な色の折り紙を見せてくれたので、カラフルなボールを作りたくなった。

問八 — 線部⑥「ほのかに言い聞かせるように、彼はゆっくりと繰り返した」とありますが、この時の武市の様子を説明した次の文の（ ）に入ることをばを、【場面2】から探し、五字で書きぬきなさい。

自分の思いを（ ） 伝えようとしている。

問九 — 線部⑦「なぜだかほのかは、泣きたくなかった」、⑨「ほのかは泣きたくなるのだ」とありますが、この二つの表現からどのようなことが読み取れますか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 武市とのやりとりを通して、ほのかが自分の気持ちの隠れた部分を理解していったということ。
- イ 武市の言葉を思い返すことで、ほのかが自分の意外な気持ちに気づいてしまったということ。
- ウ クラスで起こった出来事をふり返り、ほのかが自分の複雑な気持ちを整理できたということ。
- エ 武市の行動を通して、ほのかが自分の気持ちのあいまいなところを見直そうとしたということ。

問十 — 線部⑧「皆に踏みつけにされる」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 発した声が小さすぎて、何を言ったのかだれにも聞き取られないこと。
- イ 発した言葉が皆に受け入れられず、無かったようにされること。
- ウ 発した内容が難しすぎるので、だれにも理解してもらえないこと。
- エ 発した意見が皆に反対されて、問いつめられてしまうこと。

問十一 — 線部⑩「じゃあ、やってみる」とありますが、どうしてほのかは「やってみる」気になったのですか。【場面1】を読んで、その理由を三十五字以内で説明しなさい。（ ）。「 」は字数に数えます。

問十二 — 線部⑪「陽太は、今日はずっともいい日だと思った」とありますが、その理由として考えられるものを次のア〜エから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 憧れの存在であるほのかをばげますことができ、うれしかったから。
- イ はっとするほど美しい瞳でほのかに見つめられて、きまりが悪かったから。
- ウ 泣きそうになりながらもがんばるほのかがすばらしくて、感動したから。
- エ 自信に満ちたいいつものほのかになつたように感じて、安心したから。
- オ ほのかがいつも通り感謝の気持ちを表してくれて、ほっとしたから。

問十三 【場面1】、【場面2】の表現上の持ちようとして適当なものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一文一文を短くすることで、登場人物の心情の移り変わりをテンポ良く表現している。
- イ 長い会話のやりとりをくり返すことで、登場人物の複雑な心情を丁寧に表現している。
- ウ 回想シーンを何度も描くことで、いろいろな登場人物の心情を生き生きと表現している。
- エ 登場人物のしぐさや表情を細かく描くことで、心情の変化がわかるように表現している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一般に、「わからない」「この原因のひとつに、分野がとて細かく分かれて、専門性が高くなっている」ということがあります。複雑で専門性の高い技術が生み出された結果、エネルギー、動力機関、通信、食料生産や医療、衣服、娯楽やスポーツまで、わたしたちの生活のあらゆる部分を科学技術が支えています。

技術、そして科学技術は、その時代に生きている人々によって求められ発展してきたものであるはずですから、わたしたちはそれらの科学技術を使う主人公です。しかし、はたしてわたしたちの科学技術に対する理解は、科学の発展とともに進んでいるでしょうか？

たとえば、あなたのマワリで、「科学はむずかしいから」と決めつけて、苦手だと思っている人はいませんか。あなた自身はどうでしょう。科学的理論と実用化のレベルが複雑で高度なために、一握りの人たちにしかわからないものになってしまっているのは事実です。

専門家や技術者が作り出したものを、マニュアルの通りに使うことさえできれば、そのしくみなどを知る必要はない、という人もいられるかもしれません。しかし、そのような使い方は、キョウキュウする側から示された技術の「良い部分」しか見えません。科学技術を提供する側からは「良い部分」しか聞かれないのだとしたら……。それらを使う主人公であるわたしたちは、与えられる情報だけではなく、科学的背景やしぐさを少しでも知った上で、生活の中に取り入れるか、取り入れないのかを判断することが必要です。

良いこと（ベネフィット）も悪いこと（リスク）も考えながら科学技術とつきあっていく、その第一歩は、「知ること」です。生活の中にある科学技術。毎日使うならなおのこと、その技術が持っている能力や背景を意識し知ることに対して積極的にトライしてみませんか。

なかには、技術的に可能だから作ってしまったけれども、実際に使う立場、現場にテラシテ実践的でないという場合もあります。「非電化工房」を主宰する発明家の藤村靖之さんが『エコライフ&スローライフを実現する愉しい非電化』（洋泉社）という本の中で述べているミシンについての記述は、とても興味深いものです。

かつてミシンは足踏み式でした。足下の、鉄製のペダルを両足でリズムカルに踏み、その力で動いたクランクが大きな輪を回転させます。輪にかかった革のベルトを通して、ミシン本体に動力を伝え、針の上下運動を作り出し布地を縫い合わせる、という実に巧みな機械システムの組み合わせでできていました。

足踏みミシンは、足下のペダルと作業台の上の本体で構成されていますから、ミシン全体の大きさは小さな学習机ほどになります。

戦前から高度成長期にかけては、どこの家でも座敷のすみにミシンが置いてあり、母親は家族の洋服を仕立てたり古くなつた手ぬぐいを折り重ねて雑巾を作つたりと、家族の生活に必要なものをミシンを使って作り出していました。

しばらくして、ミシンは電動に変わっていききます。電動ミシンは足踏み式と違って、片足でペダルを踏めば高速で運針でき、「機械とタイピングを合わせる」という微妙なテクニックは不要です。そして、ペダルの動力をベルトで本体に伝える機構が不要になると、ミシンは小型化していきます。こうなると、使わないときに座敷のすみを占領することなく押入にしまうことができるようになります。ポータブルミシンの登場です。

④ ミシンを使う人がだんだんと減ってきたのは一九七〇〜八〇年ごろからで、ポータブルミシンが登場した時代とほぼ重なります。既製の価格が安くなってきたということも関係があるでしょう。

ポータブルミシンといっても、初期のものは足踏みミシンと同様、本体は鉄製。重いのです。二〇キログラムほどはあったのではないのでしょうか。縫い物をするときには押入から出すのが一仕事で、座敷のすみにあったところのように、カバー代わりの風呂敷をさらつと取ればよかつたのはカッテが違います。既製服が大衆化し、ミシンかけの機会が減るとともに、都会の住宅事情を反映してコンパクトになったことは、進歩と言えたかもしれませぬ。と同時に、いざ「ミシンかけをしよう」と思ったときに要する手間は大きくなりました。

そのころ商店街などを歩くと、ミシンのセールスマンが刺繍入りのエプロンをして、「新しく便利で、高機能な電動ミシン」の実演販売をする姿がよく見られました。直線や単純なジグザグ縫いに加え、いろいろな形の模様縫いや刺繍縫いができるようになったりと、機能はどんどん増えていきました。しかし、雑巾を縫つたり、破れを修理したり、洋服を仕立てるなど、家庭で使う機能は、ほとんど直線とジグザグ縫いだけです。ヘビークーザーであればあるほど、直線かジグザグ縫いで十分で、複雑な模様縫い機能が活躍する機会は、実際には宣伝文句ほどは多くはありません。機能が増えたぶん実用性が増したかという点、そうでもなかったのです。やがて、ミシンにはマイコンが搭載され、使い方はややこしくなっています。スイッチの数は増えるし、針や押さえ金などの部品の数もどんどん増えます。

家族の服をせっせと仕立てていた女性たちにとって、マイコン制御はうつつとうしい機能でした。押入に鎮座するうつつとうしい高機能ミシン。ミシンは「便利になった」といわれながら、<sup>⑤</sup>「成長」していったというのです。わたしの家でも、かつて足踏みミシンを人に譲つて電動ミシンを買いました。その後、ポータブルミシン、コンピューターミシンへと買い換えていったことは、藤村氏が示した物語と一致します。わたしは、母がああとき足踏みミシンを人に譲つたことが悔やまれてなりません。

洋裁離れだけではなく、最近では洋服は海外の安い労働力によって生産され、驚くような安さで売られ、傷まなくても流行が去れば捨てられる。洋服のその後の歴史を思うと、「ミシンの高性能化」は本当に必要な技術だったのかどうか？ 自信を持ってイエスと答えることはできません。

生活の労力を機械を使ってシヨリするとき、電力は欠かせないエネルギーで、生活を豊かにするために大いに役立ったことは疑いのないことです。でもこれからのわたしたちは、電化や自動化の本当に必要な部分とそうでない部分とをよく見極める目を持つことが必要だと思えます。

わたしたちは本当に、「全自動生活」を望んでいるのでしょうか？ 仮にそうだとしたら「全自動生活」の向こうにあるものはなんなのでしょうか。

もつと速く、もつと大きく、もつと高く、もつと強く、もつと便利に、と発展してきた科学技術。これまでいくつも見えてきたように、「もつと」を望むわたしたちは、<sup>⑦</sup>「もつとたくさんのブラックボックス」を増やそうとしていることでもあります。

二一世紀を目前にした二〇〇〇年秋に流れた、ある通信会社のコマーシャルにこんなコピーが使われていました。

「子どものころ、夢見た未来がやってきた」  
三〇年前の子どもの夢見たのはアニメや、ヒーローものの主人公たちが使っている腕時計型の映像通信装置、移動中でも本部と連絡を取り合える通信機器、通信している相手の位置が特定できる装置……。これらは、いま、携帯電話、カメラ付き携帯、GPSとして、家電量販店で売られ、手に入るようになりました。

かつて人々は、科学が明るい未来を切り拓くというイメージを抱いていましたが、扱方によっては原爆や公害、薬害など科学がもたらす負の部分があることも忘れてはなりません。<sup>⑧</sup>これらは光と影の関係にあるといつてもいいでしょう。社会問題となつた「科学による望まない結果」は公害や薬害を経験しました。これからも、予測し得ない健康障害や環境破壊などが起こる可能性があります。

技術が発達し手足がどんどん伸びていった結果、自分の指先がなにをしているのかを確かめられなくなっている部分が見えてきています。だとしたら、手足を伸ばしても、自分の指先を見ながらコントロールできることや、自分でコントロールできないところまでは手足を伸ばさない知恵も、これからのわたしには必要な能力です。わたしたち自身の選択によって手足が自分の思うとおりに動いたり、求める仕事をしてくれたり、わたしたちと科学技術の関係はもつと楽しく、広がりのあるものになることでしょうか。

(佐倉統／古田ゆかり『おはようからおやすみまでの科学』)

\*主宰：中心となって物事をうまく運ぶ人。

\*マイコン：小型化したコンピューター。

\*コピー：広告などの文章、文案。

問一 線部1〜6のカタカナを漢字に直し、漢字はひらがなで読みを答えなさい。ただし、必要な場合はひらがなで送りがなも書きなさい。

問二 線部①「わたしたちの科学技術に対する理解は、科学の発展とともに進んでいるでしょうか……？」とありますが、これに対して筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 科学的理論の理論を知らなくても生活できるので、科学の発展とともに理解は進んでいないと考えている。
- イ 科学的理論に対する人々の意識が高まっているので、科学の発展とともに理解は進んでいると考えている。
- ウ 科学的理論はわかるが科学に苦手意識があるので、科学の発展とともに理解は進んでいないと考えている。
- エ 科学技術の専門家たちが理論を説明してくれるので、科学の発展とともに理解は進んでいると考えている。

問三 — 線部②「一握りの人たち」とありますが、この人たちにあてはまるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学技術の知識に精通している人。

イ 科学技術に興味をしめしている人。

ウ 科学技術のリスクを考えている人。

エ 科学技術を日常生活で使っている人。

問四 — 線部③「ミシンについての記述は、とても興味深いものです」とありますが、「ミシンについての記述」をまとめた次の文章の(Ⅰ)・(Ⅱ)にあてはまることばをそれぞれ指定した字数で本文から探し、書きぬきなさい。

ミシンは技術的に可能な(Ⅰ 二字)を増やしていった。そのために(Ⅱ 三字)が増したように思えたが、かえって使いにくくなった。

問五 — 線部④「ミシンを使う人がだんだんと減ってきた」とありますが、その理由として本文にあげられているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 電動になったので、機械とタイミングを合わせるというテクニックがいらなくなったから。

イ これまでの機構が不要になり小型化していったので、置き場所に困らなくなったから。

ウ これまではいつでも簡単に使えたが、機械化により準備に手間がかかるようになったから。

エ 既製服が手軽に手に入るようになったので、家族の服などを縫う必要がなくなったから。

問六 — 線部⑤「どんどん使われなくなった機械に『成長』していった」とありますが、筆者が「成長」ということばを使うことで伝えたかったことは何ですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア なぜ予想通り便利なものにならなかったのかという疑問。

イ 目指したものは異なる結果を招いたことへの皮肉。

ウ 不要なものを作り出してしまったことへのいきどおり。

エ 便利なものはずなのに排除はじきされてしまうことへの困惑こんわく。

問七 — 線部⑥「わたしは、母があつたとき足踏みミシンを人に譲ったことが悔やまれてなりません」とありますが、なぜ悔やまれるのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 高性能なミシンへと買い換えてから、母が洋服を作らなくなってしまうことが、残念だったから。

イ 複雑なスイッチが増えたために、ミシンを使いこなせなくなった母を思い出し、悲しかったから。

ウ 足踏みミシンを手放さなければ、母はもっと多くの洋服を作れただろうと思うと、あわれだったから。

エ 海外で作られる安価な既製品の方が、母の作る服より評判が高かったことを知って、情けなかったから。

問八 — 線部⑦「もつとたくさんのブラックボックスを増やそうとしている」とありますが、「ブラックボックス」を増やさなくするためにどうすればいいかを説明したものととして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「技術が発達し手足がどんどん伸びていった」ように、もつと科学技術を発展させて生活を便利にしていくべきである。

イ 「自分の指先を見ながらコントロールできる」ように、科学技術の背景やしくみを正しく理解して使う必要がある。

ウ 「自分でコントロールできないところまでは手足を伸ばさない知恵」をつけて、これ以上科学技術を発展させてはならない。

エ 「わたしたち自身の選択によって手足が自分の思うとおりに」なるように、科学技術を完全に理解しなければならぬ。

問九 — 線部⑧「これらは光と影の関係にあるといつてもいいでしょう」とありますが、それについて生徒が話しています。

(Ⅰ)・(Ⅱ)にあてはまることばを本文からそれぞれ十字以内で探し、書きぬきなさい。

( )、( )。「」は字数に数えます。

生徒A 「光と影」ってどういうことだろう。

生徒B 例えば、GPSやカメラ付き携帯など、便利な機能が使えるようになったよね。

生徒C そうか。それが「光」の部分だね。

生徒B そう、科学が(Ⅰ)のための使われ方をしているんだよ。

生徒A だけど、私たちが予測できなかったことも起こっている気がする。

生徒C それが「影」の部分か。

生徒B その通り。科学が(Ⅱ)もあることをよく理解しないとイケないね。

問十 本文の内容として正しいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学技術の発展にともなって、科学技術の良い点だけを追い求めることが課題になった。

イ ミシンが足踏み式から発展した理由は、高度経済成長により生活が豊かになったからだ。

ウ 毎日のように足踏みミシンを使っていた人が求めたから、マイコン制御のミシンが誕生した。

エ これまでの生活を豊かにするにあたって、電力が欠かせないエネルギーであった。

問一	1	リッコウホ
	2	シタ
	3	メバエ
	4	チヂコマラ
	5	キヨラカナ

問二	問三	問四
----	----	----

問五	問六	問七	問八	問九	問十
----	----	----	----	----	----

問十一	問十二	問十三
-----	-----	-----

問一	1	マワリ
問二	2	キヨウキユウ
問三	3	テラシ
問四	4	カツテ
問五	5	文句
問六	6	シヨリ

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二
----	----	----	----	----	----	----	----	----

受 験 番 号
得 点

問一	1 立候補	2 舌	3 芽生え	4 縮こまら	5 清らかな
----	----------	--------	----------	-----------	-----------

問二	ウ	問三	ア	問四	イ
----	---	----	---	----	---

問五	自 分 に は 武 市 の よ う に	得 意 な も の も 夢 中 に	な れ る も の に も に	な い る も の に も	
問六	ウ	問七	ウ		
問八	心 を こ め て	問九	ア	問十	イ

問十一	自 分 を 認 め て く れ た 武	市 の 言 葉 が う れ し く た て	、 そ れ を 信 じ よ う と 思	っ た
問十二	ア	エ		
問十三	エ			

問一	1 マワリ	2 キョウキユウ	3 テラシ	4 カツテ	5 文句
問二	ア	問三	ア	問四	I 機 能
問五	エ	問六	イ	問七	ア
問八	イ	問九	I 明 る い 未 来 を 切 り 拓 く	II 実 用 性	
問十	エ	II も た ら す 負 の 部 分			

6 シヨリ	処理
----------	----

1 マワリ	2 キョウキユウ	3 テラシ	4 カツテ	5 文句
周り	供給	照らし	勝手	もんく

問十	エ
問八	イ
問五	エ
問二	ア

受 験 番 号
得 点

※ I生活を豊かにする